

中・高年期からの心理的発達

「適応」から「創造」へ

守屋慶子

はじめに

1980年代の半ば、高齢社会を迎えたアメリカに“productive aging”や“successful aging”という語が登場した（Butler and Gleason, 1985）。この背景には、高齢期の人々に対する「生産以上に消費する人々」、「社会の発展のへ足枷」というような社会の側からの否定的評価があった。

成人して以後の人生のほとんどを、社会が求めるさまざまな形の生産に従事し、次世代の養育に多様なレベルで力を尽くしてきた人々を、それだけでは許そうとしないアメリカの社会がそこにはあったのである。

高齢期に対するこのような否定的評価は観念的なものにとどまらない。老婦人に変装して3年間を過ごしたムーア（Moor, 1985）の記録にそのことが具体的に報告されている。（彼女のこの試みの最初の目的は、工業デザイナーとして老人や子どもに使い易い道具のデザインを考えようというものであった）。彼女の記録からは、老人たちがひととしての尊厳を踏み躪られ、生きながらにして社会から葬られていることが伝わってくる。中でも老婦人、さらに、とりわけ貧しい老婦人が受ける待遇、うっかりすると弄ばれ殺されかねない状況には目を覆いたくなる。

こうした中で、老人たちは自分たちが“productive”であることを実証するため、隠れた潜在能力や社会への貢献者としての活動を目にみえる形にする必要があった。老年期を含む生涯後半期の彼らの生産性を明らかにするための研究はこれを契機に始まったのである（Morrow-Howell, Hinterlong and Sherraden, 2001）。

本章で取上げるのはひとの心理的能力の発達であるが、生涯後半期に対する否定的評価はここでも例外ではない。ひとの心理的能力は、一般的には、生理的能力同様、青・壮年期を頂点としそれ以後は衰退の一途を辿ると考えられているのである。

この章では、このような考え方の当否を具体的に検討することによって、新しい高齢期像を描いてみたい。まず、高齢期が「衰退の時期」として描かれる原因と、その誤った像の一人歩きが許されてきた事情について述べ（ ）、次に、高齢期を含めた生涯後半期に特徴的な心理的発達について紹介する（ ）。そして最後に（ ）、ひとの生にとっては空気の存在にも相当する〈ひととの関係〉という視点から生涯後半期について考えてみたい。

・ 高齢期と高齢期像との違い

心理学者Horn（1970）が発表した発達像には流動性知能、結晶性知能が描き分けられ、前者は生涯前半期にめざましい発達を遂げそれ以後衰退を示すこと、後者は青壮年期以降にも発達を続け、

それは高齢期まで維持され緩やかな発達を続ける場合もあることが示されている¹⁾。これが発表されたのは30余年も前であるにもかかわらず、ひたすら「衰退の時期」だという高齢期像だけが一人歩きするのはなぜだろうか。

- 1. 生と死の捉え方 高齢期は「死へと向かう衰退の時期」か

「衰退の時期」という高齢期像が一般に受け入れられ易いのは、「高齢期は死の直前の時期」という捉え方にもよるのであろう。

そこで、まず高齢期と死の関係について Baltes (1987) (図1-a 参照) の図を紹介しながら考えてみよう。Baltes は、ひとの適応能力の『獲得/喪失』(gain/loss) を取り上げて理論的特徴づけを行った。ここでは、高齢期が適応能力の喪失の比率が獲得の比率を上回る時期であり、獲得はあっても全体としてみれば「喪失の時期」として特徴づけられている。

おそらくこの考え方には同意する人々の方が多いだろう。「いずれにしても死につながる時期なのだから・・・」と、死という文字通りのデッドラインから高齢期を眺めれば、そうしかならないからである。

しかし、たとえば次のように自問自答するだけでいろいろな問題が浮上する。

a) 「喪失の時期」というのは高齢期の研究以前からある先入見ではないだろうか、また、b) 行為の主体が老人であるか青年であるかによって主体の行為を違った風に解釈すること、例えば「鈍重だ」とみたり「思慮深い」とみたりすることはないだろうか、さらに、c) 獲得/喪失を判断する研究者の価値基準が変わってもこの Baltes の図は変わらないだろうか。

ここでは Baltes のとは異なる理論的特徴づけを試みよう(図1-b 参照)。

まず死を<生理的死>と<心理的死>に分けたい。心理的発達を考える際重要なのは、当然、<心理的死>だからである。

<心理的生>とは、獲得と喪失がバランスを保って展開するダイナミックな変化の過程、<心理的死>とは、ある時点の喪失によって崩れたバランスが獲得によって回復されないまま推移する状態だと考える。すなわち、心理的死は必ずしも高齢期とだけ関わりをもつのではなく、人生のどの時期にもありうる。青年期であろうと高齢期であろうと、獲得/喪失のバランスを回復できない状態に陥ったときが心理的死であり、高齢期であっても両者のバランスが保たれている限り心理的死の状態になることはない。(Baltesによると、青年期は<死から遠

生涯発達:

適応能力における獲得/喪失の比率

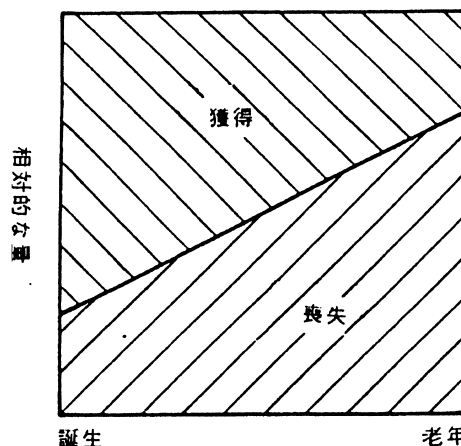


図1-a 生涯を通じて獲得/喪失の比率が迎えられる平均的コースを示した図式 (Baltes, 1987)

生涯発達:

適応能力における獲得/喪失の比率

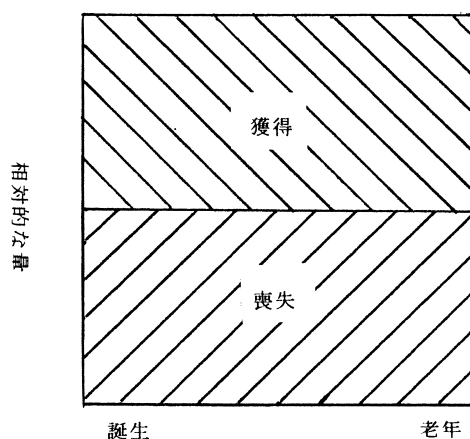


図1-b 生涯を通じて獲得/喪失の比率が迎えられる平均的コースを示した図式 (守屋)

い>時期であり、高齢期は<死に最も近い>時期である)。

では、このような生/死および獲得/喪失の考え方によって、われわれの高齢期の認識や高齢期への対応のはどのように違ってくるのであろうか。

第一に、この考え方は「高齢期の喪失」についての認識を次のように大きく変えさせてくれる。ひとの発達過程で問題となるのは、どの時期にも起きる喪失/獲得のバランスの喪失であって喪失そのものではない。第二に、どの時期であろうと、喪失を「喪失」と捉えて諦めるのではなく、<バランスの回復>の方策を具体的に考えさえすればよいことになる。第三に、ある人の高齢期が現実に「喪失の時期」としてあるとしたら、それは、多くの場合、彼ら自身がその像を内面化し、内面化されたその像によって自己誘導された結果である。そして最後に、人々が<心理的死>に至るのは、失ったバランスを回復する余裕が与えられなかったり、その回復のための活動を妨害されるというような場合である。そうでない限り失ったバランスは回復できる。

以上、Baltesとは異なる理論的特徴づけを試みた。このように、異なる発達観を描くことが発達の新しい姿の発見へとつながり、発見された新しい姿はさらに異なる発達観に導くというように、発達は発達観によってその姿を変化させる²。

- 2. 数量化され難い「結晶性知能」

不正確な高齢期像が一人歩きする第二の原因は、数量的研究を主流とする心理学の方法上の制約にある。たとえば「記憶力」のように、単位時間に記録される量や誤りの数を測定して定義できる「流動性知能」に関する研究成果はかなり蓄積されてきたが、量的指標に馴染まない「結晶性知能」生涯後半期に発達をみせる知能 については、研究成果はほとんど上がっていないのである。

例えば、フリーダン(Friedan, 1995)が老いを積極的に評価しながら描いた『老いの泉』には、老いのパワーの源の一つとして「クロス・オーバー現象」が取上げられているが³、これを数量的指標を用いて研究するのは難しい。また彼女とは異なる価値観のもとに、ボーヴォワール(de Beauvoir, 1970)も代表的著作『老い』で鋭い観察に基づいた高齢期像を描いているが、その中で老年期に満足すべき状態にない面として「心の明澄性」が挙げられている⁴。この「心の明澄性」も数量的指標で測定し確かめることは困難である。いずれの現象も日常的に観察するのは簡単なのであるが。

このように、量が困難な獲得/喪失は心理学の研究対象から外される。当然、高齢期を含む生涯後半期についても同様で、その結果、高齢期を対象とした研究では、量的指標に馴染む「流動性知能」しただって「衰退」の面だけが強調されることになる。換言すると、「喪失の時期」に象徴される高齢期像を、意図的ではないにせよ、作ってきたのは心理学なのである。客観性を重視するあまり量的研究に偏り、それが量化し難い心理的特徴の研究を脇に押しやってしまったのである。

その上、高齢期は個性化が頂点に達し「平均値」で代表させることの難しい時期であり、この点でもますます研究対象から外されることが多くなる。したがって、生涯後半期の発達研究にとって主要な課題は、こうした研究上の桎梏を解消することである。当面、役立ちそうな研究方法は高齢期にある人々自身の語り(回想)を聴き取るという方法であろう(守屋, 1995a, 1995b)。

- 3. 価値観に左右される高齢期像

歪んだ高齢期像が修正され難い第三の理由は、現代社会における価値観にある。生産性を支える

のは「力と速さ」だという認識，およびそれに基づいた価値観によってこの社会は貫かれている。当然，この生産性の概念に関係づけて人々は評価され，生涯後半期の像にもそれが反映される。その結果として描かれるのが，生産性の「足枷」，「社会の重荷」として特徴づけられる高齢者像なのである。

1930年代にヴィゴツキー（1970）は，おとなを価値の基準にして，子どもや障害者を「子どもには…が（でき）ない，おとなと比較して…が無い，健常児と比較して障害児には…がない」という研究結果を生産する心理学的研究を批判したが，上記の高齢期像のつくりかたはこれに通じるものがある⁵。「力と速さ」を基準として「高齢者は力が無く，鈍重」という像をつくるのである。

このような価値の偏重に基づいて描かれる高齢期の像は，高齢期にある人々に負の影響を及ぼすだけでなく，社会全体に取り返しのつかない問題を抱え込ませることに人々は気づいていないようである。「社会の足枷」や「重荷」となるのは高齢期の人々ではなく，価値の偏重が作り出す高齢期像であり，その像に影響され生きる元気を失う人々なのである。

次にこのことを示す簡潔な例を一つ紹介しよう。

「獲得を上回る喪失の時期」として高齢期を描いた Baltes の図（図 1 - a）を示されて「生きるのが嫌になった」と暗い声で感想を洩らしたのは高齢期の人々ではない。心理学を学ぶ大学生たちである。学生たちには高齢期はまだ遙か先の未来でしかない。それにもかかわらず，高齢期へ向けに適応能力の喪失が増大する図は，彼らの生きる意欲を確実に奪うのである。

ひとの発達が，良くも悪くも，「過去」だけでなくまだ見ぬ「未来」への希望からも大きな影響を受けるということを，彼らの感想は端的に示している。発達研究では，ある時点の発達の状態をそれ以前（過去）に受けた働きかけの結果として，すなわち現在を過去との因果関係だけによって説明しようとすることが多い。例えば，「問題児」をみつけると，その子どもの生育歴だけを執拗に追及し，それによって問題を説明しようとする場合がそれに当たる。しかし，大学生たちの上記の感想は，ひとを対象とする限り，その発達に重要なのは過去だけではないということを示している。

現在求められているのは，力と速さだけが偏重される「生産性」の概念に関係づけて描かれた高齢期像を，新しい生産性の概念によって描き直すことである。数十年をかけて達成した感情の制御，寛容性，豊富で個性的な経験，歴史・文化についての造詣の深さ，などがこの社会にとっていかに貴重なものかを理解できる目 価値観 を社会に育てること，それが新しい生産性の概念に通じる道ではないかと思われる。

次代を担う青年たちに生きる勇気を与え得るのは，このような新しい生産性の概念に基づいてつくり直された高齢期像であろう。

・ 高齢期への発達：賢さ（wisdom）の達成

生きるということは，他の人々との間で引き起こす大小さまざまな葛藤に向き合い，それを解決する過程だということもできる。人生で直面するさまざまな問題の解決過程で，ひとは状況や相手を変化させるだけでなく自己をも変えることで自らの発達を遂げる。したがって，ひとが重大な問

題を解決する過程には、そのひとの心理的発達 of 諸側面が映し出されている。

現実の問題の解決には、問題が複雑になるほど、感情の適切な制御やひとへの寛容性、広がり and 深さをもった思考や適切な判断、文化的、歴史的なパースペクティブをもった事態の分析などが必要である。このような賢さ (wisdom) 先述の結晶性知能に属するもの の獲得は壮年期以前のいわゆる学校教育だけで達成することはできない。現実の様々な問題に向き合い、それを解決、克服する過程で賢さははじめて獲得される。この発達が人生後半期にずれ込むのはそのためである。

この節では高齢期にかけて達成される賢さについて取り上げる。

- 1. 「問題」から良循環を生み出す 経験の捉え直しと知識の妥当性の検討

表1には、人々が生涯において直面した問題の解決方法が挙げられている (守屋, 1995a, 1995b, 1997)。いずれも回想内容の分析で得られたものであるが、ここで目につくのは、問題を根本的に解決する場合が少なく、次善の解決策が選択されることが多いという点である。その根本的解決の難しさは、回想にみる限り、問題そのものに社会の伝統的仕組みや複雑な人間関係が絡んでいて、個人の能力や努力の範囲を超える場合が多いことに起因している。

しかし、そうはいつでも、次善の策は次善にしか過ぎないようで、そのことがさらに別の問題を生み、その新しい問題がその後の苦しみの原因となっている。

表1 日常生活における問題の解決法 (守屋, 1997, 2004)

問題解決の方法	男 性		女 性	
	事例数	割合 (%)	事例数	割合 (%)
根本的解決	23	12.8	6	3.4
問題からの逃避	24	13.4	29	16.2
否定的感情の一時的解消	51	28.5	53	29.6
否定的感情の抑制	81	45.3	91	50.8

しかし、人々は、その後時間をかけて自身の力でこの種の精神的負担から自己を解放する。回想によると、そのことに数十年を要することも珍しくない。ともあれ、高齢期前後には、多くの人が負の体験にまみれた過去の自己を新しい自己へと脱皮させることに成功している。

ところで、この脱皮は単に数十年という時間の経過によりもたらされたものではなさそうだ。当時の自己を、それを取り巻く時代や社会・文化状況など全体の中に改めて位置づけて対象化する < 省察 > という活動がそこにはみられる。

以下に長い苦しみを経た後の省察の一例を紹介する。

事例B (守屋, 1997)

「会社の同僚が仕事の現場で有毒ガスを吸って死亡・・・本来は、会社がまず安全確認を行ったうえで社員を派遣すべきであったのに、それをしないまま派遣したからだった。彼の葬式の当日、会社の幹部は、私にその事実を口外することを禁じた。・・・もし口外すれば、私は即刻何かの理

由をつけてくびにされ、就職難の当時のことだから新しい職を見つけることもできず、家族は路頭に迷っただろう。…さんざん思い悩んだが『事実を明かしても死人は戻らない』と思い直し、結局、訴えなかった。…今と違って当時は『会社が絶対』で、会社を非難したりはできない時代だった。…それにしても自分は今日まで彼を裏切り通した。…』

この回想者は、生涯前半期の問題事態に直面して採った次善の策を、高齢期前後になって捉え直している。「問題は自分の弱さだけでなく卑劣な会社の側にもあったのだ」という認識、雇用の被雇用者に対する絶対的権限の行使を許していた社会への批判に基づいて、過去の「恥ずべき」自己を捉え直し、30余年ぶりに新しい自己としての出発を彼なりに果たしている。

このような省察能力について、多くの回想は、次のような点を示唆している。まず、それは人生で直面した苦しみや疑問の解決過程で発達すること、第二に、その発達には問題状況に関係する知識の獲得や学びも必要だということがである。上記の事例のB氏は、R大学で毎週開かれる公開講座の受講者の一人である。

大学や地域で開く講座などに出席する高齢者の多くには、強制された学びではなく、抱えた疑問や問題の解決を目指す<問いから出発した学び> 学びの本来の姿 がみられる。学びによって達成された省察の能力が、次には学びの質を高め、それは再び省察の質を高める、という良循環がそこには見られる。

中・高年期以降の人々が蓄積した経験は、新しい学びにより得た知識によって捉え直され、新しい命を吹き込まれる。同時に、その新しい知識は、蓄積された経験によって現実の生活世界での妥当性を検討される。このような経験と知識の間を往還する思考活動は、一般的には、ある程度の経験を蓄積した中・高年期になってはじめて可能となる。

問題事態に取り組んだ結果としてもたらされる良循環は、その問題に関与する人々だけでなく周囲の人々や社会にとっても貴重なものであろう。

- 2 . 他者への寛容性 - 追体験と共感

多くの回想で目を惹くのは、「年をとると（50歳頃になると）他人の事情や気持ちが分かるようになる・・・」という述懐である。次に2例を紹介しよう。

事例M（守屋，1995a）

「…母親は自分の家のお金を持ち出して逃げた人。…その子どもの一人が自分。…父の死後は叔母の家にやられた。叔母は良い顔をしなかった。…小学校4年生の時おばあさんに引き取られ…毎朝、4時ごろに起きて牛の餌とり、それを牛に食べさせてから学校…学校は1里（4km弱）ほどもあったが、当時のことだから、もちろん歩いて通った。従兄からは牛に使う鞭で叩かれもし…嫌になって大阪へ逃げた。大阪では船場の陶器問屋に丁稚として住み込み、朝早くから夜遅くまで働いた。…陶器は重いので持ち運びが辛かった。…暇を見つけては好きな本を夢中で読んだ。読んでいと呼ばれても気がつかず、大きな算盤を投げつけられたこともあった。…今考えると、当時叔母にも子どもが4人居たのだから、私の面倒までみるのは大変だったろう。…歳をとるとひとの事情や気持ちが解るようになる…」⁶

事例 S (守屋, 1995a)

「…結婚するとすぐ夫は招集され、間もなく戦死。…毎日息子を背負って農作業をするのが大変だった。再婚話を持ってきてくれる人が居ても、(再婚したくても) 姑が凄惨な剣幕で怒った。…夫婦で畑仕事をしている人を見ると羨ましかった。うちら3ヶ月しか結婚生活しとらんのやもん。…息子は高校を出るとすぐ就職し、結婚後は嫁と一緒に暮らした。自分が姑で苦労したから『嫁にはあんな思いをさせたらあかん』と思っていたから、仲良く暮らせた。…その息子が31歳で事故死。…息子の死後まだ間もないのに、嫁は結婚前からつき合っていたという男性と結婚したいと言い出した。子どもも生まれ、亡くなった息子を思うと腹が立ったけど、夫の戦死後の辛さを思い出して結婚を許した。…」⁷

これらの回想からは、他者に寛容になる過程 - 他人のおかれた状況や苦しみに、自分の過去の苦しみやそのときの状況を重ね、追体験する過程がよみとれる。この「他者への寛容性」は、回想では高齢期前後の経験として多く報告される。

このような寛容性については、Grahamらの研究でも報告されている(Graham & Weiner, 1991)。彼らは、エピソードを用いて、怒り、同情、援助の気持などの経年変化を調べた。その結果、研究協力者として参加した高齢者群は若年者群より一般的に寛大で利他的(他の年齢群に比べて怒りは弱く、同情、援助の気持が強い)であることを明らかにしている⁸。

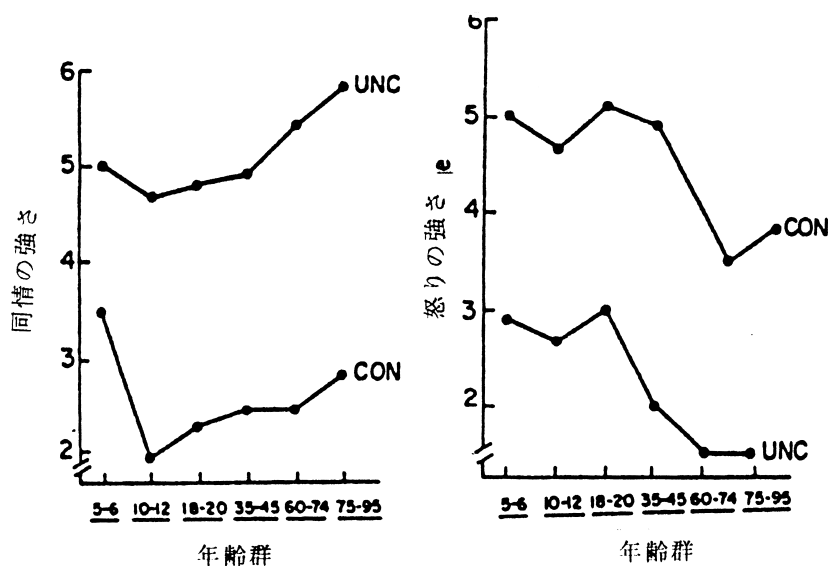


図2 「怒り」および「同情」の評定値の加齢変化

con: 原因の制御が可能な場合, unc: 原因の制御が不可能な場合
〔Graham et al. (1991) から抜粋〕

Grahamらはこの結果から、高齢者が寛容になるのは「生命の危険に対して敏感」になるからだと推測している。他方、守屋の研究では多くの回想者が「歳をとると(50歳頃になると)」という理由づけをしている。しかし、回想を分析するとどちらの説明も当たっていないことが判る。寛容になれるのは、複雑で難しい対人関係からくる問題を自分のこととして解決したその経験が、他人のおかれた苦しい状況の追体験と共感に役立つからである。

「やさしい人は苦勞人に多い」という古くから伝えられている経験知の正しさを、このことは示

してもいる。

寛容性は、経験知に根差すものであるため、それがみられるのは高齢期前後になる場合が多いが、だからといってすべての高齢者に備わる特性ではない。この点は、他の心理的特性と同様である。同じような問題に直面しても、相手を（したがって自分をも）欺くことで問題状況をすり抜けた経験が寛容性に繋がることはないのである。

- 3 . <強いられた自己> から <在りたい自己> の実現へ

発達心理学では年齢を指標とした心理的特徴づけを行う場合が多いが、高齢期には年齢という指標はほとんど意味を持たなくなる。それは高齢期においてひとの個性化が頂点に達するからである (Sadler, 2000)。

この個性化は自己のあり方を探り、創る過程においても顕著にみられる。生涯前半期には、社会の在り方や周囲の人々を念頭に置き、他者に適応する形で自己のあり方を決めていたひとびとも、高齢期前後には、それぞれが <在りたい自己> を実現する方向で活動している。誰もが、過去の <強いられた自己> とバランスをとれる方向や、未達成の <在りたい自己> へさらに近づく方向を探りつつ、新しい自己を創ることに生きている。

以下の例にそれを見ることができる。

事例Y (守屋, 1995a)

「…私の父は 〃 の発明者。戦争中で結婚相手が少なく、仕方なく体が悪くて徴兵される心配の無い男性と19歳で結婚。

最近は老人がボランティアで老人ホームの掃除なんかしとるけど私は嫌や。大姑、姑、小姑、舅、そして夫の5人を死ぬまで世話したから。

…何か一つ間違えると3人から繰り返し責められて辛かった。責められているときに背負っている子どもが泣き出すと、『子どもを泣かしたらあかんやないか』とまた叱られた。しかし、子どもが泣くと放免されることがあり、それ以来くどく責められると背中の子を掴んで泣かせ、『子どもが泣いていますから』と言ってその場を逃れた。…すべてを『すみません』で済ませる、イライラが溜まってくると、ためておいた欠けた食器を裏の川に力一杯投げつけて憂さ晴らしするしか方法がなかった。…息子二人は出来が良く地元でも『未は博士か大臣か』と評判だったが、ほぼその通り育てた。

これからがやっと私の人生。…息子に勧められて海外旅行ではほとんどの国に行った。…赤いスポーツカーでハイウェイをドライブする。息子は心配して、ドライブイン毎に電話をかけて私の無事を確かめている…」⁹

事例M (守屋, 1995a)

「人間は土壇場にならないと判らない。…戦争中、船が敵の魚雷にやられた時いつも可愛がってくれていた人は自分だけ先に逃げた。海に飛び込んで助けてくれたのは日頃冷たいと思っていた人。土壇場になると人は変わる。何よりも死ぬときに後悔せんように、したいことをしておこう。…大事なのは自分に正直に生きること。」

事例 S (守屋, 1995a)

「息子が、高校のとき、土木の仕事をしたと言ったので、自分の関わった現場に連れて行ったら『おやじ、よくやったな』と褒めてくれた。その時は嬉しく『この仕事やってよかった』と思った。…でも60歳過ぎて何のために働いているのか分からなくなり仕事をやめた。…浪人生活は暢気だ。…一人息子が一人娘の女性と結婚したいというので婿養子にやり、自分は一人暮らしになった、息子が心配して『ホームに入る費用は引き受けるから』とホームに入るのを勧めるので、ここに入った。…自分は体が不自由なので、それでも出来ることを考える。…今はホームで使う包丁とぎを引き受けてやっている。当てにされ喜ばれている。物を作るのも大事だが物を壊さないことも大事。…人生で大事なことは真面目に働くこと。」

<在りたい自己>への思いが、高齢期前後になってつる原因の一つは、生涯前半期にはそれについて考えることが難しかったからである。生涯前半期に人々が社会から求められたのは、与えられた状況への適応だけだった。そうした中では、ひとびとは初めて経験する状況への適応に精一杯で、<在りたい自己>の実現はおろか、それについて考える余裕など持てなかったのである。

回想によると、ひとびとが<在りたい自己>の実現へ向けて活動できるようになるのは、一般に、高齢期前後以降である。これは、<在りたい自己>像を創るには人生経験をフィルターとし、創っては壊し、壊しては創る時間が必要だからである。

高齢期の人々の語りは、現在、生涯前半期にあって<強いられた自己>と格闘している人々や、<自己実現>を性急に迫られながら<在りたい自己>をどう描くかに戸惑っている人々にとって、道標の役割を果たしてくれるはずである。

・ <ひととの関係> からみた生涯後半期 新しい関係を創る

われわれの生涯はひととの関係の中で始まり、そして経過する。ある意味では自明のことだが、ひととの関係は生きるための重要な条件の一つである。自己のアイデンティティや存在意義を確認することも、心身の安全を図るということも、ひととの関係があってはじめて可能となる。しかし、ひととの関係が高齢期前後の発達との関係で取上げられることはほとんどない。

これは奇妙なことである。ひととの関係の重要性は乳・幼児期におけるそれと変わるところはないからである。もちろん、自立以前の時期と、一応の自立をはたした時期とでは、その重要性に質的な違いがあるのではあるが。

<ひととの関係>という視点からみると、高齢期を含めた生涯後半期はどのような時期なのだろうか。

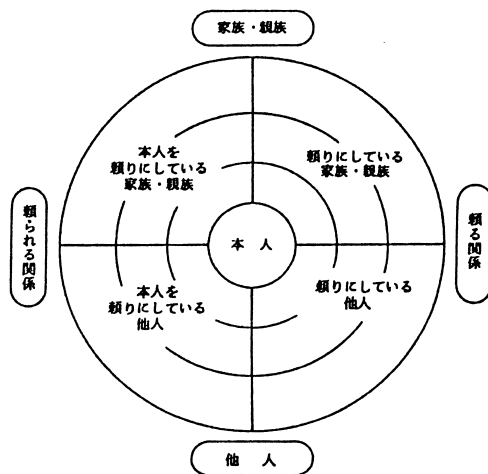
- 1. 自立を助け合う関係 - <頼り・頼られる> 関係へ

「何のためにひとは生きる(生きなければならない)のか」という問いに決った答えは無い。しかし、人々の回想からは、自らの存在意義が他の人々との関係の中で確認できたとき、この問いは姿を消す、つまり問う必要がなくなるのだということが解る(守屋, 2005)¹⁰。

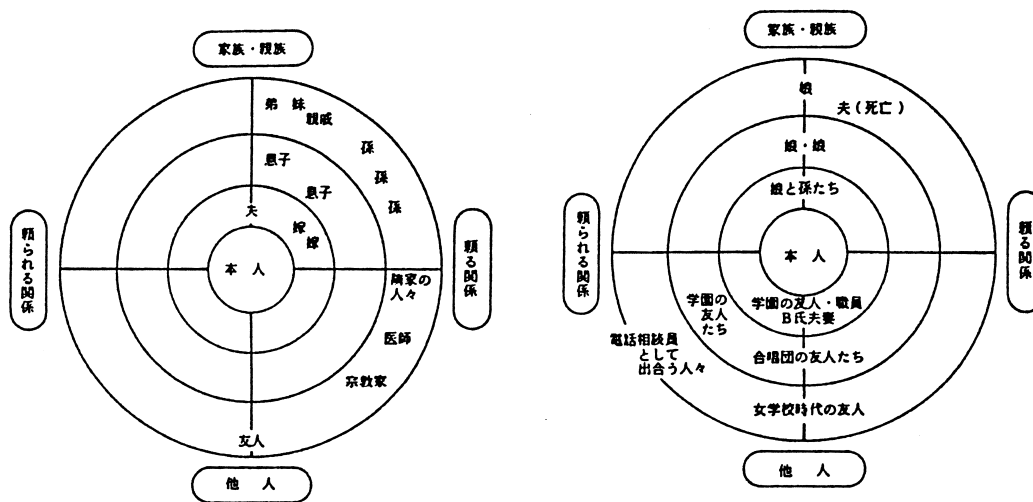
高齢期の人々の主観的幸福感と人々との関係の在り方について回想を通して考察した研究(守屋,

1993)によると、意外なことに、頼れる人が沢山いる高齢者が、必ずしも主観的幸福感を抱いているとは限らない。

例えば、K(図3)は、申し分のない<頼れる関係>を沢山もっているにもかかわらず、不眠や不安に悩まされ精神安定剤を服用する毎日である。それに対して、O(図3)がもつ人々との関係は、そのほとんどが<頼り・頼られる>関係である。Oは電話相談員や合唱団員として悩みをもつ人々を支えることによって自己の存在意義を確認する日々を送っている。



(a) 関係の相手を「家族・親族/他人」で分け、関係の内容を「頼る/頼られる」で分け、これらの組合せによって、「本人」の周囲に4ゾーンをつくり、対人関係が、どのような人との、どのような関係であるかを示す。「頼る/頼られる」の2ゾーンを分ける線の上に記されているのは、「頼ったり頼られたり」の関係を示す。本人に近い同心円ほど親密度が高いものとする。



(b) Kさん(女性、88歳)の対人関係ネットワーク

(c) Oさん(女性、81歳)の対人関係ネットワーク

図3 対人関係ネットワーク

次に事例Oの回想の一部を紹介する。

事例O(守屋, 1993)

「・・・夫は戦地で亡くなり、乳飲み子を含めて4人の子を抱え苦労した。昼は会社で働き夜は遅くまで内職。戦後の食糧難の中、食べた振りをして自分の分も削って子どもたちに食べさせる

毎日。長女は小学校のとき就学前の妹を連れて子連れ通学を通し、卒業の時には「親孝行賞」をもらった。…高等教育を受けさせてくれた自分の親に感謝し、自分もせめて長子だけは高校まで…と考えたが、それを知った近所の人々は「妾でもしているのか…」という中傷やデマをふりまき、勤め先に投書までしていた。…近所との関係ですっかり疲れ、子連れ心中をしようと長女に相談したが、長女からは『私は嫌よ、死ぬ気があれば何でもできるはず』と反対された。

今5人が生きているのは長女のおかげ…現在は老人大学で学ぶ傍ら、知事から委嘱された電話相談員を引き受け、趣味で始めた合唱団員としての活動の一環として少年院を訪問したり…。どちらも喜んでもらえるので元気がでる…』。

人々から孤立して死を考え、人々の喜びから生きる元気を得た〇の回想は、自己の存在意義の確認ができない状態で生きることの難しさを語っている。

また別の高齢者は、やさしい息子家族に引き取られて不自由なく暮らしていたが、間もなく故郷での独居生活に戻ってしまった。故郷では入院中の友人たちを見舞って身の回りの世話をし、それを喜ぶ友人たちの喜びによって充実した日々を取り戻した。彼女と友人との関係は、表面的には、友人たちから<頼られる関係>のようであるが、実質は<頼り・頼られる>関係だったのである。

生涯前半期に人々は、<自分に向けられた愛>から喜びを与えられるが、高齢期前後の人々の多くは<他者へ向けた愛>によって他者に喜びをもたらし、その喜びを自らの喜びとしている。そこには、与えられる喜びと自ら創り出す喜びとの違いがある。

主観的幸福感の強い人々の<頼り・頼られる>対人関係がさまざまな活動を介してつくられる点を考えると、こうした対人関係ネットワークをつくれる条件や場が人々、とりわけ高齢者には必要であり、そうした条件や場を用意することが社会に期待されていることが判る。

- 2. <与えられた関係>から<選り出した関係>へ 血縁関係からの離脱

われわれは生涯にわたり人々と関係をもちながら生活するが、その経験はそれぞれ内面化されて<対人関係図式>とも呼ぶべき図式となり、それはその後の他者への働きかけ方を決める手がかりとして用いられる。この<図式>は生活の中で絶えず作られ、また作り変えられる。これは誕生以来、誰もが日常的に行っていることである。

しかし、この<図式>の用い方は、回想によると、対人経験を蓄積した生涯後半期から高齢期にかけて変化する。<図式>は、誕生に始まる生涯前半期にはもっぱら与えられた状況に適應するために用いられる。これに対し生涯後半期には自分が選んだ人々との関係を新しく創り出すために活用される。すなわち、図式は生涯前半期には関係適應的に用いられ、後半期には関係創造的に用いられるようになるのである。

次に、ある高齢者の場合を例示してみよう。

事例N（守屋，1995a）

「…ホーム入居前はマンションで一人暮らし。その頃は深夜に救急車のサイレンを耳にすると『もしここで死んだら誰にも判らへん』と夜中に起きだしたりして気が変になってね。…70近くなって体力が落ちてくると不安になってくる…』。

彼は風呂敷包み一つを手に老人ホームに入居した。それは、独居からくる不安を解消するためホームの人々との関係を求めてのことであった。ホーム入居後、彼は入居者たちとともにホーム全体に活気を生み出し、入居者たちの信頼を得て見違えるように元気になった。年に何回かの海外旅行では、出合った日本人旅行者を得意な外国語で助け、これらの人々とは帰国後も交流を続けた。ある若い世代の友人からは「パパ」と慕われ、彼女の結婚、子の誕生などにも招かれて家族ぐるみの親交を深めた。ホームの人々や新しい友人たちとの関係の中で、彼は不安を解消し、充実した日々を送れるようになったのである¹¹。

この彼も定年までは一流商社の社員だった。いわゆる一流大学を卒業、商社では何度も海外へ派遣される花形社員で、若いときは同僚たちに対してそれが自慢だった。派遣先のパリでは、昼は仕事、夜は語学学校で学習という働きずめの毎日だった。しかし、単身赴任で子どもがつかないでいる彼に、会社は非情にも「子どもがいないから」という理由で単身赴任を繰り返し命じた。「断ればよかった。妻は子どもも持てず他界、まるで私の両親の世話をするために結婚したみたいで可哀想だった...。」と形式的だった家族関係を後悔していた。

事例1（守屋,1997）

『歳だから一人暮らしは止めたほうが良い。面倒をみるから』と息子に勧められて同居。…小学生の頃から続けてきた織物の仕事を止め、長年暮らしてきた家を買った。家を処分したお金は息子の家の新築資金を負担するために出し、年金もローンの返済のために出した。…ところが、引っ越してみると新築の家の食堂には私の椅子は無く、食事は二階の部屋で一人で…孫に話しかけようとする、東京出身の嫁は『子どもが京都弁になると困る』と言って話しかけるのを抑えた…料理の手伝いも『子どもが和食は嫌いだから』と断られる…息子に訴えたくても嫁が息子に辛く当たると可哀想やから言えず…ローン返済の10年間はすんだら息子家族から離れて老人ホームに入ろうと決めて我慢した。…今、ホームでは好きな友だちと好きなように助け合って毎日楽しい…ときどき息子が訪ねてくるけど、もうへつらう必要はない』。

「ホーム入居」という結論は、同居してからの10年間に作り変えた＜対人関係図式＞から導かれたものである。与えられた血縁関係から離れて、自分で選びとった関係を創る場としてホーム入居を決心した。そのときの彼女には、「自立しなければ自由で対等な関係はつくれない」という発言や、「息子にはもう親ではなく妻が大事」という＜ひととの関係＞の捉え直しがみられる。自尊心や自分の存在意義を確認できる日々のために、与えられた関係ではなく自らが選びとった関係が彼女には必要だったのである。

われわれは血縁関係の中に誕生し、血縁関係から完全に離れることはほとんどないと考えがちであるが、そうではない。血縁関係の破綻を解決する過程で選びとった新しい関係が創られることは多い。さらに、選びとった人々との関係に、むしろ、より対等な在り方が期待できることも判る。

ホーム入居前に作った対人関係図式は、選びとった人々との関係を創るために、また彼らなりの自立と自由の達成のために役立てられている。

彼らの創った多様な関係の在り方は、血縁関係をほとんど唯一つの家族関係とみなしてきたこの社会に、将来の家族関係の在り方のモデルを提供してくれている。またさらに、それは、メンバーの自立を妨げる非対等な関係が温存されがちな血縁家族のあり方にも一石を投じるものでもある。

- 3 . 後続世代との関係：歴史・文化の体現者として

ひとが高齢期前後につくるべき重要な関係の一つに、次代を託す後続世代との関係が挙げられる。それが重要なのは、半世紀を越えて生きてきた人々の心身に刻み込まれた時代の歴史や文化が、後続世代の歴史的認識にとって欠かせないからである。

もちろん、われわれは専門的歴史研究や資料から歴史を学ぶことができる。しかし、このような抽象化された歴史や文化がより確かなものとして引き継がれるのは、そこで生きてきた人々の文脈を伴った具体的体験が補われたときではなからうか。

a) 心身に刻み込まれた歴史

次の例は、敗戦後の50余年間苦しみ通した過去の体験の回想である。

事例 S (守屋, 1995a)

「私が胎児のとき両親が渡米。…アメリカの小学校では『橋の下の乞食』というニックネームをつけられ…何かにつけて低く見られ苛められた。…太平洋戦争中は市民権があるのに収容所に強制収容され…G Iになれと言われ納得できないまま入隊した…『日本人として日本に銃は向けられない、行くならヨーロッパしかない』と思いノルマンディー行きの24部隊、米国人部隊の弾よけの部隊に入隊…その戦地では多くの日系人が戦死した…選択の余地など無い成り行き任せ。…今振り返ってみてもそれしか方法は無かった。日本もアメリカも恨んだ…」

移民として、日本人として受けた差別、弾よけ部隊の一員になる以外に生きる道のなかった戦時下の差別、これらに対する二重、三重の恨みが彼の語りに込められている。これは個人的体験談ではあるが、愚痴や泣き言の域を超え、人々を翻弄した戦時の異常な状況を具体的に伝え、非人間的な差別や戦争を告発している。

このような過去の体験の捉え直しには、当時の状況、時代、政治、文化などを広く深く認識することが必要であるが、彼らに期待されるのは、当時の体験を想起しつつ彼らが語ること、そして「現代」という地点に立つことで彼らが手にしたパースペクティブを後続世代に手渡してくれることである。

しかし、歴史や社会、文化の具体的体現者としての役割を果たせるためには、彼らが語るだけでは不十分である。彼らの語りに生命を吹き込むのは、手渡される側（子世代、孫世代）の追体験だからである。つまり、語り手と聴き手の〈共同作業〉がここでは必要なのである。そしてこの共同作業は、いうまでもなく、信頼で結ばれた両者の関係を条件として進められるものである¹²。

b) 伝統的文化の軋みの解決：新しい文化の創り手として

伝統的文化と新しい文化との摩擦は世代間葛藤の形で現れるが、われわれは「葛藤」の否定的な面にのみ目を奪われ、それが持つ積極的な面、新しい文化を創り出す契機としての側面を見逃してはいないだろうか。

次の例は、葛藤を解決する過程で高齢期の親世代が新しい文化の創り手ともなり得ることを示している。

事例7 (守屋, 1997)

母親Aは、日常的に家事を手伝わせていた娘から不公平だと詰られた。息子には家事を分担させていなかったからである。Aは娘の主張を入れ息子にも家事を分担させようとした。しかし息子はこれに応じなかった。家庭の雰囲気は険悪になる中で、両者の板挟みとなったAは、これまで子どもたちに伝統的性役割を無思慮に押し付けてきた自分、息子だけに甘い態度をとってきた自分を省みた。その結果改めて気づいたことは、息子への甘い態度が、息子に老後の世話を期待している自分のへつらいに起因するということであった。

Aは自立した老後を覚悟してそれを息子に伝えた。息子は家を出て独立した。

- 2で紹介した関係づくりの場合もそうだが、高齢者たちは、時代の推移が伝統的文化との間で生む軋みを解決する過程で、新しい文化を創りだしている。高齢者のこのような試みにわれわれが着実な成果を期待できるのは、それが過去の数々の失敗体験に根差しているからである。新しい文化の担い手は若者だけだと考えられがちだが、そうではないであろう。

おわりに

生涯後半期に著しい発達を遂げる賢さや人間性に着目すれば、高齢期は「より人間的な発達を達成する時期」だというべきであろう。けっして「喪失の時期」などではない。人間性の充実した時期として生涯後半期を提示できたとき、この社会は二重の意味で豊かな社会へと脱皮できるのではないだろうか。その一つは、生涯後半期の人々がその能力に見合った活動の機会に恵まれる社会になるという意味において、もう一つは、生涯前半期の人々が、行き惑うことなく希望をもって生涯後半期へと歩める社会になる、という意味においてである。

高齢者たちが発達させたより人間的な能力を活かす社会を実現するためには、先ず、「生産性」の従来の概念に代えて、より人間的な価値に基づく「生産性」の概念を新しく構築する作業に取り組まなければならない。

そしてこの作業は、次の問いに答えることと並行して進められるべきであろう。その問とは、人類史上はじめて達成した高い平均寿命と、それによって発達が可能となった能力を、われわれはどういう目的で、誰のために、どのように活かすべきかというものである。

注

- 1 知能の構造に関するRaymond B. CattellとJhon, L.Hornによると、知能は流動性知能(fluid intelligence)と結晶性知能(crystallid intelligence)とに区別される。

前者は基本的な情報処理過程(例えば記憶、課題解決など)に関する知能、後者は文化的知識(例えば言語、社会的知能など)に関する知能である。前者は25歳頃までに発達のピークを迎え、その後下降するが、後者は高齢期までさらに緩やかな発達をみせるとされている。しかし、前者に比べ後者は量的研究が困難なため、研究の成果があがっていない。

- 2 心理学専攻の大学院生にBaltesの図(図1-a)を示し、それぞれの発達観を図示してもらおうと、Baltes同様に高齢期に向かって喪失が獲得を上回ると考えている学生は約半数に過ぎない。

約10%の学生は、Baltesとは逆に右下がりの線を描き、高齢期に向けて獲得が喪失を上回ると考え、約40%の学生は、守屋(図1-b)の場合同様、獲得と喪失はどの時期にもバランスを保っていると考えている。

- 3 フリーダンは、老いのパワーの源の一つとしてクロスオーバー現象(歳をとることで、ジェンダーの枠が無くなりより自由になること)を挙げ、老いてからも人間の進化は続き、唯一他の時期と異なるのは死ぬということだけだと述べている。

「問題などない、古傷の痛みがやわらぎ、あるいは痛みがまだあっても十分に耐えられると気づくのは、なんと不思議なことだろう。…過去の重荷が取り除かれると、これまで暗く、わびしく、陰気で、憂鬱に思えた、第三年代への進路が驚くほど明るくなる。…もし高齢者の多くが現在これを体験しているのなら、たとえまだそれに名称がつけられていなくても、単に個人的な現象と片づけるわけにゆかない」と。

彼女は、老年期を測る尺度を、それ以前の時期を測る尺度「若さと力」から柔軟さの尺度に変えている。訳者のあとがきによると、彼女は「誠実に創造的に自らの老いに向き合い、過去にとらわれずに、まだ見ぬ未来に進もう」、「私はかつてないほどの自由…」と語ったとのことである。

- 4 ポーヴォワールの著作全体を通してうかがえるのは、老年期をきわめて否定的にとらえる価値観である。

「老いが心の明澄をもたらすという偏見は徹底的に排除されなければならない。古代以来、成人は人間の境涯を楽観的な光のもとで見ようと試みてきた…成人は、人生の終わりは、人生を引き裂く相克の解決であると考えたいことを欲した。一方、これは都合の良い幻影でもあった。なぜなら、この幻影は、老人たちがあらゆる痛苦にうちひしがれていることを知っているにもかかわらず、老人たちは幸福なのだと思えることを人に許し、彼らをその境涯にうち棄てておくことを許すからである。…」

「心の明澄」や「相克の解決」が彼女には重要だということがこの引用部分から判る。また、老年期をそれが満足すべき状態にない時期として彼女は捉えている。訳者あとがきには、この著書の出版当時、彼女は自らの「老いの到来」に「苦悩の色を際立たせるようになった」と記されている。

- 5 ヴィゴツキーは、このような研究を指して子どもの「ネガ写真」しかつくりたくない心理学を批判したのである。しかし、この中の「子ども」や「障害者」を高齢者に置き換えたのが現代の高齢者像である。「高齢者は…ができない」、「高齢者には…が無い」。

これは高齢者の積極的な独自性については何一つ語っていない。発達心理学の課題は、高齢者の人格について欠如指摘型の発達像ではなくポジティブな像を提供することである。

- 6 彼は、小学校を中退して勉強できなかったのを取り戻したいと考え、子どもたちが独立し定年になったのを機に兵庫県I老人大学に入学して勉強を始めた。回想は在籍3年目のときのものである。

- 7 彼女はR老人ホームの居住者で、筆者らを自分の部屋に招き入れて静かに話を聞かせてくれた。

- 8 Grahamらは、出来事の原因帰属の如何が感情の強さとどのように関わるかを明らかにしようとした。使用したエピソードの内容には、止むを得ない制御不可能な出来事と制御できたはずの出来事の二種類を用意した。被調査者は、a) エピソードに含まれる出来事の制御可能性の程度の評価、b) それらの出来事の原因に関わる人物に対する怒り、同情、援助の強さの評定を求められた。

- 9 この女性は、当時、兵庫県I老人大学に在籍しており、話し振りが非常に活発であった。

- 10 事故により重度の障害状態に陥った星野は、両親や姉弟、友人などの懸命の看護にもかかわらず死ぬことばかりを考えていた。彼が頼れる人々は十分過ぎるほどあったにもかかわらず、である。

その彼に生きる意欲を芽生えさせたのは他の患者たちとの関係であった。それは、彼の手柄に寄せる信頼感や愛情によって結ばれたものであったり、彼から闘病の気力を与えられた患者の謝意によって結ばれたものであったり、さまざまである。

しかし、いずれの場合にも共通するのは、それらが「他者から頼られる」自己を確認できる関係だという点であった(守屋, 2005a, 2005b)。この関係によって彼は自己の存在意義を確認でき、それが彼の生きる意欲を生み出していったのである。

- 11 彼は、死に臨んだとき傍に居て欲しい人々のリストに、血縁とは無関係のこのような家族を挙げていた。ひとが怖れるのは死ではない、孤独の中での死だと述べたのは、通りで行き倒れる多くの人々の手を握り、死を看取ったマザー・テレサである。ひととの関係の中で始まり、死の瞬間にも人々との関係の中に在りたいと望むのが、ひとの生の特徴だということができよう。

12 高齢者の回想の聴き取りで注意すべき点は、回想者が聴き手に対してどの程度の信頼感を持てるかという点である。例えば、聴き手が20歳前後の学生の場合、「あんたらに話しても解ってもらえんからな……」という言葉が頻繁に口にされる。

回想者は、聴き手を年齢も含めて総合的に判断しながら、何を、どの程度まで話すべきか、話せるか、話してもよいか、を決める。「この人なら話せる」という回想者の聴き手に対する信頼感は、回想の聴き取りにおける「共同作業」には重要である。

文 献

- American Institute for Research. (1977). Jobs for older workers in U.S. industry: Possibilities and prospects. Final Report. Washington, D.C.: Center for Work and Aging.
- Baltes, P. B. (1987). Theoretical propositions of Life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23, 5, 611- 626.
- Butler, Robert N. and Herbert P. Gleason (eds.), (1985). Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life. Springer Pub. New York. (岡本祐三訳『プロダクティブ・エイジング：高齢者は未来を切り開く』日本評論社)
- ヴィゴツキー 柴田義松訳 (1970).精神発達の理論 明治図書
- de Beauvoir, S. (1970). La Vieillesse (朝吹三吉訳『老い 上巻・下巻』人文書院)
- Friedan, B. (1993). The Fountain of Age. (山本博子/寺沢恵美子訳『老いの泉 上・下』西村書店)
- Graham, S. & B. Weiner (1991). Testing judgments about attribution-emotion-action linkages: a lifespan approach. *Social Cognition*, Vol. 9, No. 3, pp. 254-276.
- Horn, J. L. (1970). Organization of data on life-span development of human abilities. In L. R. Goulet & B. Baltes (Eds.), Life-span Developmental Psychology : Research and Theory. Academic Press.
- Moor, P. (1985). Disguised: True Story. (木村治美訳『私は三年間老人だった: 明日の自分のためにできること』朝日出版社)
- 守屋慶子 (1993).高齢者の不安と対人関係ネットワーク 「寝たきりに対する不安」を手がかりとした考察 立命館教育科学研究, 第3号, 49-60.
- 守屋慶子 (1995a) 心理学的研究に自伝的回想を用いることの妥当性 - 高齢者の回想による日常的問題解決過程の解明の場合 立命館教育科学プロジェクト研究シリーズ , 119-153.
- 守屋慶子 (1995b).自立を助け合う家族の創造 柏木恵子・高橋恵子編『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房。
- 守屋慶子 (1997).日常生活における否定的感情の自己制御 立命館教育科学研究 第11号, 7-23.
- 守屋慶子 (2003).日常の問題解決における否定的感情の処理 柏木恵子・高橋恵子編『心理学とジェンダー』有斐閣。
- 守屋慶子 (2005a)。「発達心理学研究」誌の14年 発達研究にみられる問題点 立命館文学, 第588号, 13-32.
- 守屋慶子 (2005b).発達研究の課題：一事例から「発達」を学ぶ。『児童心理学の進歩2005年版』, 182 - 201。
- Morrow-Howell, N., J. Hinterlong and M. Sherraden (eds.) (2001). Productive aging: concepts and challenges. Johns Hopkins University Press.
- Sadler, William A. (2000). THE THIRD AGE: Six Principles for Growth and Renewal after Forty. DA CAPO PRESS.

(本学名誉教授)

Psychological Development in the Second Half of the Life Span :
from Adaptation to Creation

by
Keiko Moriya

According to what has been generally thought, psychological abilities of man reach their developmental peaks in the first half of the life span and decline thereafter. This misunderstanding about human development has stemmed from (a) the exaggerated importance our society gives to such qualities as speed and power, and (b) 'scientific' emphasis many psychologists place on quantitative research methods as opposed to qualitative ones. Most human-like development, however, takes place in the latter half of the life span, when crystallized intelligence and wisdom develop. Among the important qualities that develop in the latter half of the life span are: the ability to counter and overcome vicious circles, the ability to reflect upon and reinterpret one's own experiences, and the tolerance to others. The latter half of the life span is also noticeable in that it is only the individuals at this stage that can hand down the culture and history of the society they live in as something they themselves actually experienced. In other words, it is in the latter half of the life span that individuals at last stop merely adapting to social forces. They start creating selves more unique and humane. A more accurate developmental model of the latter half of the life span is necessary for those who are still in the first half of the life span as well as for those who are already in the second half of the life span, for otherwise they will not be able to move onto their own old age with hope and courage. It is time for psychologists to discard the present misconception about the old age, which depicts the old age as the age of losses, and for the Japanese society as a whole to part with its preoccupation with such qualities as speed and power.